

昭和33年1月15日 第三種郵便物認可 平成21年1月15日発行(本誌日発行)第44巻第2号

# 週刊新潮

1月15日号  
320円



2

空から見た

# 雪の カッパドキア

雪原に揺えられた熱気球が  
真ん丸に膨らんで、今まさに  
飛び上がらんとしている。  
トルコの世界遺産カッパドキアの  
空中散歩。眼下に絶景が広がる。

撮影・文 ● 岩間 幸司





ケーキを飾るクリームのようにも見える

**コ** イツというバーナーの音が頭上で数回。その後、気球は音もなく、ふわりと浮かんだ。乗客たちから歓声がおこると、気球は一気に空高く舞い上がった。

カップドキアは、標高10000mを超すアナトリア高原の中部に広がる大奇岩地帯。数億年前、エルジエス山の噴火によって造られた地層が、長い年月をかけて浸食され、硬い部分だけが残されて、今日のような不思議な景観が生まれた。

気球は雲に届くほどの高さまで上昇したり、奇岩群の谷間へ降りて静止したり、時には岩山の頭をかすめるように飛ぶ。気温はマイナス10℃を下回るが、寒さも忘れ、地上からの眺めとはまた違った景観に乗客たちは息を呑む。地上の音も聞こえてこない。ゆっくりと進むからか、高度はあるのに不思議と恐怖感はない。上昇する時やコースを変える時にバーナーが炎を上げる以外は、実に静かな飛行だ。

(右)バーナーから炎が上がる時以外は、静寂の世界だ  
(左)着陸後にはシャンパンで乾杯



記念の飛行証明書を手に